

【文学】31期春季資料集

有名な文学作品の冒頭部分

- ・ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになつていらっしやいました。 『蜘蛛の糸』 芥川龍之介
- ・ある朝、グレゴール・ザムザが気がかりな夢から目ざめたとき、自分がベッドの上で一匹の巨大な毒虫に変わってしまっているのに気づいた。 『変身』 カフカ
- ・道がつづら折りになつて、いよいよ天城峠が近づいたと思うころ、雨足が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓からわたしを追つて来た。 『伊豆の踊子』 川端康成
- ・男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。 『土佐日記』 紀貫之
- ・行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。 『方丈記』 鴨長明
- ・木曾路はすべて山の中である。 『夜明け前』 島崎藤村
- ・私は、その男の写真を三葉、見たことがある。 『人間失格』 太宰治
- ・私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。 『こころ』 夏目漱石
- ・山路を登りながら、こう考えた。
智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。 『草枕』 夏目漱石
- ・山椒魚は悲しんだ。彼は彼の棲家である岩屋から外へ出てみようとしたのであるが、頭が出口につかへて外へ出ることができなかつたのである。 『山椒魚』 井伏鱒二
- ・二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを云いながら、歩いておりました。 『注文の多い料理店』 宮沢賢治
- ・彼は老いていた。小さな船でメキシコ湾流に漕ぎ出し、独りで漁をしていた。一匹も釣れない日が、既に84日も続いていた。 『老人と海』 ヘミングウェイ

・春は、曙。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこし明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。 『枕草子』 清少納言

・行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。 『方丈記』 鴨長明

・きょう、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かも知れないが、私にはわからない。養老院から電報をもらった。「ハハウエノシライタム。マイソウアス」これでは何もわからない。恐らく昨日だったのだろう。 『異邦人』 カミュ

・名前は思い出せないが、ラ・マンチャのある村に、そう遠くない昔、一人の郷土が住んでいた。 『ドン・キホーテ』 セルバンテス

・ほんとうに僕の話が聞きたいなら、きっと、僕がどこで生まれて、どんなうんざりする子ども時代を過ごしたかとか、僕が生まれる前に両親が何をしていたかといった、デイヴィッド・コパフィールド的な、うんざりすることを知りたがるんだろうね。

『ライ麦畑でつかまえて』 サリンジャー

・昔、男初冠して、平城の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男かいまみてけり。 『伊勢物語』 作者・未詳

・いつれの御時にか、女御更衣あまた侍ひ給ひけるなかに、いとやむごとな際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。 『源氏物語』 紫式部

・越後の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の一群が歩いている。『山椒太夫』 森鷗外

・廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お歯ぐる溝（ドブ）に灯火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行来にはかり知られぬ全盛をうらないで……。

『たけくらべ』 樋口一葉

・メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。 『走れメロス』 太宰治

・八月のある日、男が一人、行方不明になった。休暇を利用して、汽車で半日ばかり 海岸に出掛けたきり、消息をたってしまったのだ。 『砂の女』 安部公房